京の台所・錦市場がつなぐ「京の食文化」を子どもたちに伝えよう!

春・秋連結学期 | 今出川校地開講科目

1. 目的・概要

the purpose and an outline

直径390m、横幅40mたらずの小路に約130店舗のお店が並ぶ錦市場は「京の台所」と呼ばれています。錦市場は、朝から活気づき料亭や旅館の料理に使われる“ほんまもん”の食材を求めにプロの料理人が訪れます。また、「京の食文化」とは豊かな水に恵まれた環境と、都として栄えた歴史や伝統によって育まれて来ました。そして、その文化や伝統は京都の人々の食に対する愛や誇りを受け継ぐ心と共にあります。しかし近年この様な光景は減り、錦市場の観光地化が進んでいます。

そこで私達は、このまま京都の人々が錦市場から離れて行ってしまえば、いずれは観光客の人々も錦市場の価値に疑問を抱く様になるのではないかと考えました。そして「観光客に偏り、地域の人々が離れている」「地域に食が根付いていない」という2つ課題を立てました。この課題は錦市場の担い手不足に繋がる恐れがあげられます。よって私達自身も伝承者となり「京の食文化に対して興味を持ち、その素晴らしさ、食に関わる人々の想いを知ろう!」というコンセプトのもと、未来の伝承者候補である子ども達に伝えていく事になりました。そして錦市場でのフィールドワークや同志社小学校での授業を行いました。

annual schedule

2010年	4月	「京の食文化」の定義を考える ▶各班に分かれて各チームの出した定義をプレゼンテーション 錦市場商店街理事長の宇津さんにヒアリング
	5月	ゲストスピーカー・越智さん(湯波吉店主)のお話を聞く、錦市場でインタビュー
	6月	活動内容・目的の明確化、小学校に授業案のプレゼン・推敲
	7月	ゲストスピーカー・藤田あかりさん(「京都職人」「京都老舗」著者)のお話を聞く 錦市場・京の食に携わる方々にインタビュー、還幸祭取材、中間報告会
	8月	小学校と授業案の最終調整、錦市場でのインタビュー・ヒアリング 山本香苗さんへの取材　(松永料理教室「京のおばんざい100選」出版) 小学校授業準備、大原合宿
	9月	小学校授業最終調整▶小学校の先生と打ち合わせ・授業の流れを確定 課外活動の最終調整▶錦市場の受け入れ店の方々に確認
	10月	授業開始、錦市場フィールドワーク ▶10月2週目に各クラス、食材ごとに6班に分けて課外活動 フィールドワークのまとめ・発表の授業

2010年	11月	京の食文化・おばんざいの授業（ゲストスピーカー：料理研究家　山本香苗さん） レシピ案を山本さんご協力のもと子ども達と考える ▶チャレンジウィークに調理実習をする予定の下、行う小学校チャレンジウィーク ▶考案したレシピを基に山本さん・学生と協力しておばんざいの調理 ▶今までの映像を編集しチャレンジウィーク最終日で発表
	12月	今までのまとめ、最終まとめの冊子の内容を考える
2011年	1月	最終報告会、冊子作り

2. 成果達成度

the achievement degree

私達がこのプロジェクトを遂行するにあたって、まず始めに掲げた目標は「子ども達に京の食文化に興味を持ってもらい、錦市場の人々の思いを知ってもらう」ことでした。

同志社小学校での授業では、まず子ども達に興味のあるテーマに分かれてもらいました。知らないことを自分達で調べ、さらに分からないことは実際に錦市場に赴きインタビューをすることで解決しました。子ども達はお店の方々の話を熱心に聞き、今まで知らなかった事実に驚いたり、次々と質問を投げかけたり、積極的に京の食文化について学びました。そしてそれをもとにクラス単位で発表を行い、自分が担当しなかったテーマについても学びました。最後に、錦市場で買った食材を使って京のおばんざいを作りました。子ども達は錦市場で教えてもらったことを活かして、料理研究家の方にアドバイスをもらいながらそれぞれレシピを考えました。この活動を通して、子ども達から「今後も錦市場に通いたい」「おばんざいをまた作りたい」という意見聞くことができ、私達の目標は達成できたように思います。

3. プロジェクトを通じて

through a project

私達のプロジェクトでは主に錦市場と同志社小学校の2つの場に関わり活動してきました。どちらの場でもそれぞれに学ぶことが沢山あり、人との繋がりの大切さを身を持って知りました。

まず錦市場では私達自身がお店や食材の知識を学ぶため、八百屋や魚屋など10軒ほどのお店のご主人・女将を訪ねました。食材の産地や独自の調理法、また時代の変遷に合わせながら店を続ける工夫など聞いていると、錦市場を守ってきた人々には並々ならぬ努力とこだわりがあることに気付きました。また同志社を卒業された先輩の多く、それがこの活動を温かく応援してくださるキッカケともなったので、自分の大学はこんなにも京都の人々に大事にされていることを改めて実感しました。

同志社小学校では4年生の授業に参加し、大学生が錦市場や京都の食材について教える側として教壇に立ちました。しかし嬉しいことに予想以上に生徒達の好奇心や「自分で調べたい」という想いが強く、授業では生徒達から私達に教えてもらうことの方が多かったように思います。彼らのやる気を引き出すためには「いかに面白そうに、分かりやすく、丁寧に伝えてあげるか」がポイントでした。そのために授業前の準備では何度もミーティングを重ねて授業案を練り直しました。準備にかかる時間が多く学生の負担にもなりがちだったのに、こうやって最後までやり遂げることができたのは、私達が頑張れば頑張るほどその分子ども達の笑顔が見れるのだと気付けたからかもしれません。

このプロジェクトを通じて最も学んだことはやはり人との繋がりを大切にすることです。繋がるためにはそれ相応の努力が必要で、しかも努力すればするほどその分太い繋がりを持つことができ温かな雰囲気で迎えてもらえるのです。

[編集後記]

私達が出会ったのは、去年の4月の事です。学年も学部も超えた個性あふれるメンバーが、1つのチームとなってこれまで活動して来ました。何度も授業時間外に集まりコンセプトや今後の活動について話し合い、決まったコンセプトを基に具体的な活動を開始させて行きました。

個人的な意見としては、就職活動やゼミを理由にメンバーにはたくさん迷惑をかけてしまい申し訳ない気持ちが残っています。それぞれ、プロジェクト以外の生活もあって忙しかったはずなのにと今になって感じています。ですが私がここまで来られたのは、メンバーのみんなが温かく、補い合うという気持ちを大切にしてくれたからです。メンバーや遠藤さん、TAの小寺さん、SAの小寺さんに出会え、支えてもらい達成する事が出来ました。1年は、本当にあっという間です。この1年の思い出を、また何年後かにメンバーで集まって語れたらと思います。

今年プロジェクトを取ろうかと考えているみなさん、チームで行動を起こす一連のプロセスから学べる何かがあると思います。最後になりましたが、このプロジェクトに携わって下さった多くの方々、本当にありがとうございました。

[プロジェクトメンバー]

笹井 瑶(神3)　佐々木 路代(文3)　鈴木 真理(文4)　池邑 綾乃(法3)　弘光 美穂(法4)　平尾 悠貴(経済4)　金井 弘毅(経済4)
安藤 美穂(経済4)　深谷 僚一(経済4)　松原 朱里(政策2)　森島 佳奈(政策2)　内藤 茜(政策2)　石川 清大(社会2)
岡田 美紀(社会2)　赤井 美甫(社会3)　北尾 ゆり子(社会4)